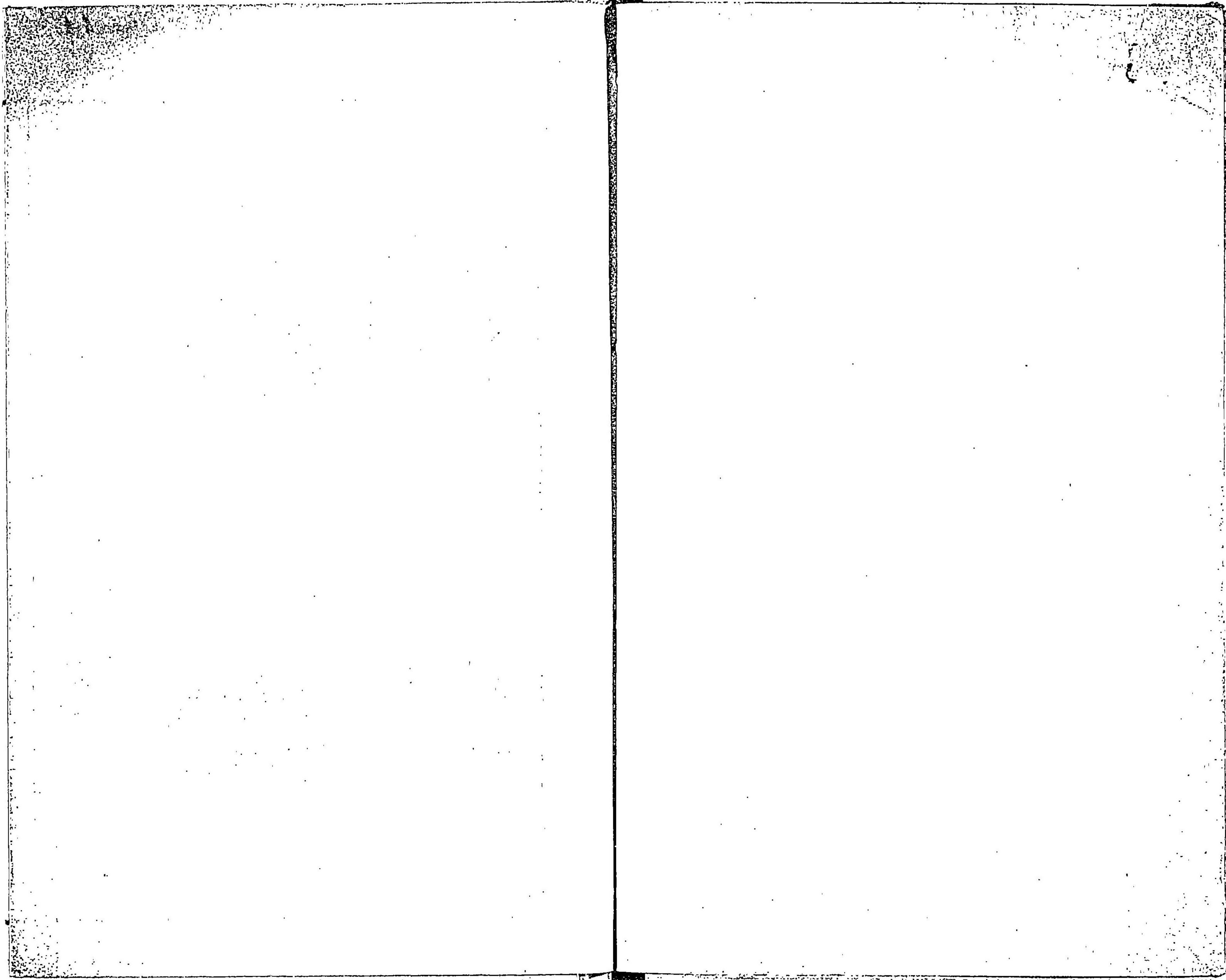


訂正

かみ子

持71

481





閩海

門鑑

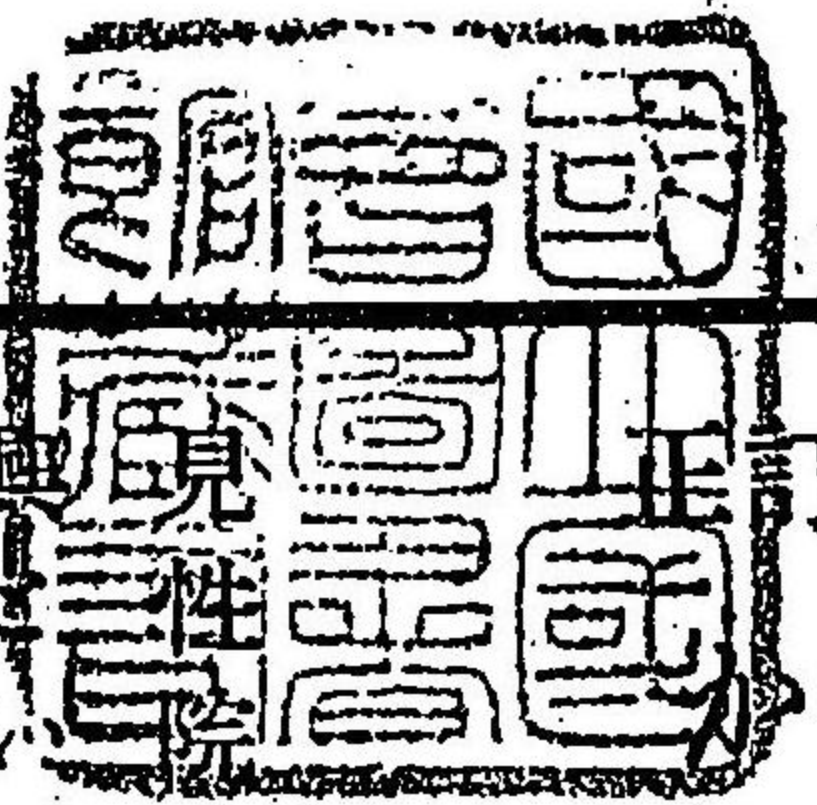
平
重
名
敬
題



余二十餘年前相知る學士諸氏の清子任せて我
 意爲主家山内侯の歴史談を百一餘卷と題して
 演出有り中々孰きかた寂香をし多第一世夫人
 見性院君の偉蹟殊可女子其人々聞傳へて
 更々再演と切望せらる遂に原稿よき摘採し以
 小冊子としし因て後にかゝる美草と歌を挿畫此
 如き聊當時乃実境直寫に擬せざるに過す今二三
 訂正を加ふは臨と重て其由記せしむ
 明治四十三年庚戌黄梅雨窓の燈下ニ於て
 重名淺

ぐみ草

在東京 土佐 長屋重名演

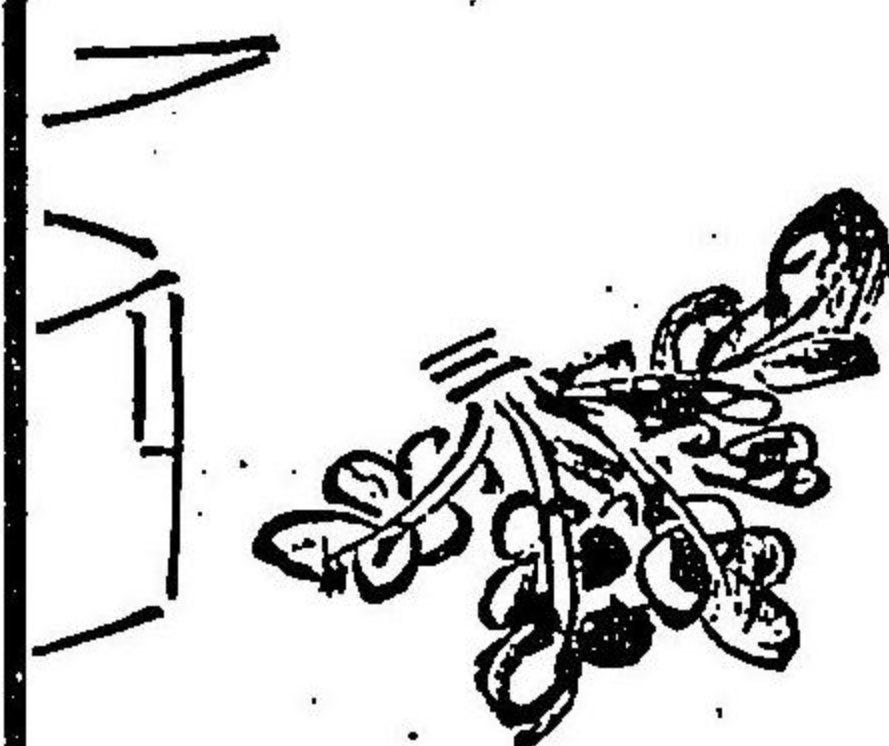


君は第一世土佐守山内一豊公の御夫人なり御實父を若宮喜助友
 一説に御父は江州淺井の家臣にして御母は石川小四郎の女な
 り又一説に不破市三郎一本市之亟に作る娘も妹も又不破氏の養
 女にして實は若宮氏の女なりとも云ふかく區々の説にていづれか是な
 るを知らず尙異説に細川氏といふ如きは最據りかたし今多きに從ふ
 君御名千代其見性院とは御戒名たり又御名の事御記録類には傳はらざ
 る處當時會計方の役人に宛られたる金子御受取書御自筆のものにて判
 然せり其御誕生の年月詳ならずといへ共御逝去の年月即御享齡より推
 すときは弘治三年ころの御生にて盛豊公(一豊公御父)尾州黒田の御難の
 年に當る果して然らば一豊公とは御年一と回り違ひの如し
 君の御紋章は藤花巴なり其形は葉を中心として花巴形と成る右は京都

大通院(元御菩提寺)にある御靈牌並に御廟に見ゆ
君御當家へ御興入の年時詳らかならずと雖多分元龜の初より天正の初
頃の此三四年間を出さるべし尤元龜元年とすれば御年十四歳に當る御
結婚には尙早過る様にはあれど戰國時代は一般に早婚行はれしとぞ
君御興入の時分には御當家年來の御貧困にて御不自由謂んかたなきに
も拘はらず君には朝夕の水仕事はもとより萬事甲斐々々しく成されし
か御臺所に俎の一ツなき程にて常に升の底を以て代用し玉ひ其庖丁の
痕跡歴然と残るもの今猶傳へて御家寶の一と云ふ云(升は松板竹縁の
ものにて八ヶ升とそ或考案には江州蒲生氏の制ならん云々右は入國後
御米庫に納りありしか後年藤並宮御建立依て御社へ移し納になり其節
摹造の分を以御藏へ納換に成る處御維新後神庫に收めに成る由)
御升の事世間にて専ら傳ふる所は一豊公平生多葉粉を好み玉へと御
貧乏の中刻仕成のもの御求め成されかたく依て御喫料は奥様常に御
手切に御仕成のごき楯の底を切臺に御用ひありしものと傳へと余は

久しくこの事を疑ひ先其多葉粉の本邦へ渡りし年時より考究せねば
ならずと此頃多葉粉の歴史を一應調へ見たり慶長十年ころの渡りに
て即一豊公御遠行の時代に當りて種へ付しと云説か果して多數たり
又元和の頃都鄙に普く翫ふなごとも記しあり尤天文、天正、文録の年代
にも渡りしとも見ゆれどそは外國人が土産に持來りた位にしてよし
や栽培したにせよ試験に過すして其貴き方々か或は極好事家かなれ
ば一二服味を見ることあるかは知らずとにかく世間に廣かりたるに
はあらざるべし況や御當家御貧乏の御口へは恐らく未廻るまじされ
ば多葉粉を御刻みと云ふは附會の説に歸するならん因て案ずるに是
は定めて野菜類即御汁の味等を御切成されし跡と思はる抑飯米を量
る器を以かのヤニの強き多葉粉の切臺に兼用しては第一差合なり是
亦舊説の成立ざる一證ならんか

御貧困の
ごき常に
榊の底を
俎に代へ
玉ふ



序に申すが是は少し深入りの説か知らねど御楨は或は御姑法秀院君より御傳來物とせば猶更全體の引合よく成るご申は元龜のころは御當家微々たる御事況や年來の御貧乏の中にはあれど姐の一つ位御求め成りがたきご云ふはちごひご過る如し是を御姑へ持て行くごきはかの岩倉御落の後御浪々中の御貧苦一層甚しき御場合に當りかやうの御事も時に取りてはあるべくそれを後々昔を忘れ玉はぬ御趣意を以御嫁女へ御傳へ成されしものごすれば最穩當の如しごかし餘り穿ち過ぎて却て直角殺牛の恐あり固り舊に従ひおく但多葉粉云々は前の考證に據り取捨す

或日の事一豊公御歸館ありしに(此年時の事は諸書に餘程早き様に見ゆれど甚疑ふべし余は公の御出身並に御録付等に關し種々の考案を費やし此を姑らく元龜の末或は天正元年春ころの事とせり委しくは百一餘談筆記にあり)公の御顔持常ならず君御氣遣在せられ取り敢ず御様子御伺上の處公には何ごも御答へ成れずして唯吐息突せ玉ふのみなれば君

には愈御案じにて御伺返しになりしに女子の知るべき事にあらずご仰せ切りにて尙御明しなされず依て君重て仰せ上げ玉ふやうは斯迄伺ふご雖猶包ませらるはよくくの御事ならん去りながら御隔心のありては最早御當家に居て何の詮なき事なりご少し御恨を籠ての御口氣にありければ公即仰せ玉ふ左程迄掛念せらる事なれば今は申し聞かさん餘の儀にあらず貧乏はご心外なるもの逆はなし實はそれを歎くなり今の時一際の奉公をなし名を天下に顯はさんには第一良き馬を持ざれば戰場の功立かたしされば常に欲しく思ひしに今日恰も東國より賣に來りしは古今稀なる駿足にて飛付計ほしく思へご奈何せん其價非常に高く陣中皆涎を流しながら誰一人求めるものなくたうごう馬主は空しく牽き去れり余は年來の宿念の事なれば別段に遺憾千萬なり返すくも貧乏人は口惜き事なりごまた大に歎き玉ふ君はつくくご御聽成されてきて仰せ上げ玉ふやうは能こそ明せられたり御志のほご御尤千萬なり左程の名馬なれば早速御求め然るべしして價はいかほごにやごあれば黄

御鏡の巢に
秘し置かれ
し黄金拾兩
を以御馬代
に捧げ玉ふ



拾兩と申すなりと答へ玉へば君には御易き事なりとて御鏡の巢に秘し置れたる封金を御取出しにて公の前へ進め参らせ是にて片時も早く召し玉へとあれば公は餘りの御意外にて先以大に驚ろかせられ仰せけるやう貧乏の中に如何してかゝる大金を持ちありしや又かく貯ある事なれば是迄の窮迫の場合に於ていかに心強ければとて秘し玉ひしとぞ君御答に其御不審のだん亦御尤の御事なり去ながらこれには仔細のあることなれば今は打明け申上ん抑御當家へ嫁づきし砌に實父手づから封金を鏡の巢へ張付け扱厳しく戒しめ申す様是は用意金として汝に與ふ然共如何に夫家貧困に際するとも猥に遣ひ果すこと無用なり唯他時もし郎君の身に取り一大事のありし際初めて用ゆべし云々依て其言を守り今迄は仰せの如く幾度も忍ひがたきも強て忍びて参らせる事なかりしが今日こそ武士の御身に取りて大切なる秋と存し上謹て奉る次第なりと一部始終を御告げ成さるれば公御悦極りて御落涙成さる君及舅家の恩義を深く御感謝ありて即名馬を牽入になる處日ならず馬揃のこと

あり公これに跨がらせられ御出場成りしにかの太く逞しき天下の逸物の事なればあたりを拂はせられ最勇ましき御事にて惣大將信長公に於ても深く感賞なし玉ひしとぞ

御用意の入りありし御鏡と傳ふるものは其徑り凡七寸厚サ一步八厘柄長サ三寸五步同幅一寸五步にて裡に行字を以て毎傍玉臺疑挂月未開寶匣似藏雲の一聯を彫上になる是は元土佐國長岡郡吸江寺に納めありしものなるが一説に湘南和尚へ御遺物なりと明治初年同寺廢せられ京都妙心寺塔頭大通院へ御納換になりし處同七年冬ころ同寺亦廢寺同様にて什物散失せんとするに際し御一門方々の御篤志に出て御買返しに成りたるもの今は正しく藤並明神の御社内に納り即御重寶の一なりとぞ

因にいふ御馬の御美談は最有名にて諸書に出てある事は既に述べた(百一餘談)蒲前儒臣湯淺勝助(常山)より何某の元へ來書を見る文意は先御美談を載せ右夫人は何れの御息女哉云々又但書に右の一條は文

拾兩と申すなりと答へ玉へば君には御易き事なりとて御鏡の巢に秘し置れたる封金を御取出しにて公の前へ進め参らせ是にて片時も早く召し玉へとあれば公は餘りの御意外にて先以大に驚ろかせられ仰せけるやう貧乏の中に如何してかゝる大金を持ちありしや又かく貯ある事なれば是迄の窮迫の場合に於ていかに心強ければとて秘し玉ひしとぞ君御答に其御不審のだん亦御尤の御事なり去ながらこれには仔細のあることなれば今は打明け申上ん抑御當家へ嫁づきし砌に實父手づから封金を鏡の巢へ張付け扱厳しく戒しめ申す様是は用意金として汝に與ふ然共如何に夫家貧困に際するとも猥に遣ひ果すこと無用なり唯他時もし郎君の身に取り一大事のありし際初めて用ゆべし云々依て其言を守り今迄は仰せの如く幾度も忍ひがたきも強て忍びて参らせる事なかりしが今日こそ武士の御身に取りて大切なる秋と存し上謹て奉る次第なりと一部始終を御告げ成さるれば公御悦極りて御落涙成さる君及舅家の恩義を深く御感謝ありて即名馬を牽入になる處日ならず馬揃のこと

あり公これに跨がらせられ御出場成りしにかの太く逞しき天下の逸物の事なればあたりを拂はせられ最勇ましき御事にて惣大將信長公に於ても深く感賞なし玉ひしとぞ

御用意の入りありし御鏡と傳ふるものは其徑り凡七寸厚サ一步八厘柄長サ三寸五歩同幅一寸五歩にて裡に行字を以て毎傍玉臺疑挂月未開寶匣似藏雲の一聯を彫上になる是は元土佐國長岡郡吸江寺に納めありしものなるが一説に湘南和尚へ御遺物なりと明治初年同寺廢せられ京都妙心寺塔頭大通院へ御納換になりし處同七年冬ころ同寺亦廢寺同様にて什物散失せんとするに際し御一門方々の御篤志に出て御買返しに成りたるもの今は正しく藤並明神の御社内に入り即御重寶の一なりとぞ

因にいふ御馬の御美談は最有名にて諸書に出てある事は既に述べたり(百一餘談備前儒臣湯淺勝助(常山)より何某の元へ來書を見る文意は先御美談を載せ右夫人は何れの御息女哉云々又但書に右の一條は文

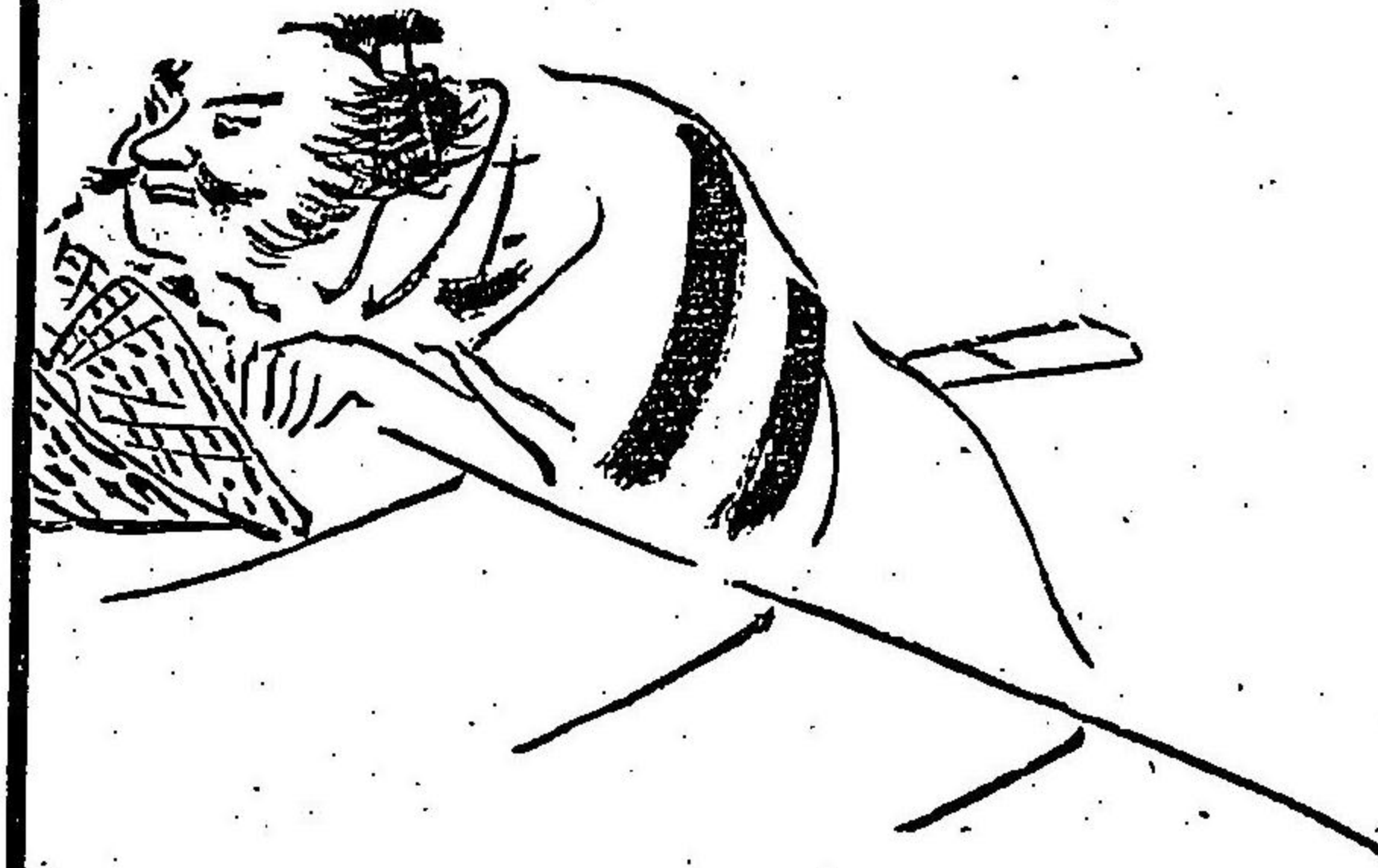
昭院殿(時の將軍)へ献せられし白石先生(新井筑後守)が藩翰譜に出居云々仲春十五日とあれと宛名何人なるか見へず臆測するに何れ御當家役人に宛たる問合の紙面ならん而して其答振の如何も傳はらず或は此質問はかの常山紀談等に載せん下地なるべし其紙面は高知松尾章行氏方に藏すと云ふ

天正十三年江州長濱大地震のとき御天主閣崩れ落つ此際只御一人子の於よね君御災難に罹らせる君の御愁歎殊に甚しく其後は是非共一兒を御養育の上追々は僧と成されて姫君の御跡吊らはせんとの御念願にある處恰三年目に或夜のこご御門前に捨兒あり(母衣を以て巻きありし由いづれ由緒ある武家の胤ならん一説に江州北村氏の子と云)急き拾擧玉ひて御名を即拾と御命しになる爾來御丹精を以凡十箇年間御養育の末御初念通京都妙心寺へ入れ玉ふかの湘南和尚と稱る高僧は此御方なり異説に拾君は一豊公の落胤とも申し又一説に初は拾君を御世繼に成さると筈の處後御弟なる康豊君に國松君後第二世土佐守忠義公御誕

生ありて御養子となる此時に當て御家中黨派立ち物論紛々遂に術策を以て拾君を寺へ捨て玉ふに至るなご云ば附會の説にて取るに足らず

慶長五年六月上杉景勝征伐に當り徳川家康公大阪を發せらる此役一豊公にも御從軍となる儲從軍諸將の家族方はいづれも大阪に留め置かるこごくなり君にも御同段御留守成されしか家康公足を擧ぐるや否石田治部少輔三成の徒事を起し徳川公を討んと大に西軍を催促し容易ならざる形勢と成るに際し君には勝れたる明智の御方にまじませば早くも時勢を察し玉ふに西軍無名にして到底天下は徳川公のものに歸すべくご御定見立ち即先彼の檄文と御意見の程を併せて一豊公御出張向へ急き御報知なし玉ふ(御出張向きとは即下野國小山といふ徳川公宿陣の地なり)此御使には孫作といふ者を遣はさる(此孫作は當時足輕位の卑き者なれども後御取立を以田中孫作と名乗り御當家功臣の一人に數へらる)孫作は急ぎ上方を出達して美濃路通下りけるに道中にて賊難に遭ひ衣

御密書を御
手つからク
ワシゼヨリ
と成され編
笠の紐とし
て御使孫作
に授け玉ふ



類大小残らず剥ぎ取られて殊の外難儀に及び一時或家の床下へ隠れ居しか(此家すし屋にてありすし桶を盗みこれを食し幸に飢を凌ぎたり云)浪人體の者一人來掛り是幸と其衣服大小を奪ひ取りそれにて再び身形を拵へ急ぎ小山に着公は此報知を得御大慶至極にて直様これを家康公へ呈し玉ふ(此時の事は尙くわしく百一餘談に出づ)

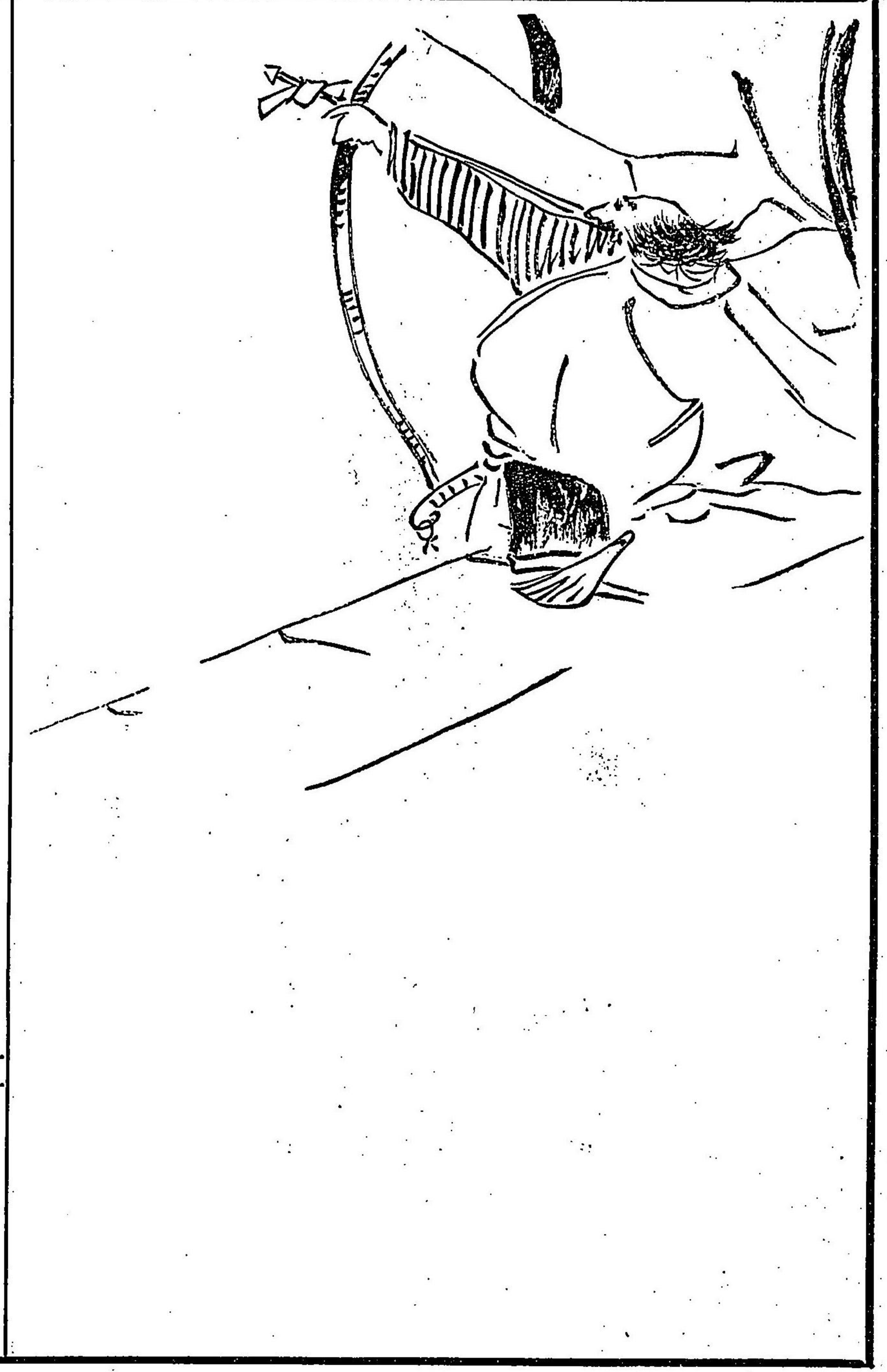
扱大阪よりの御密報は君深く御注念加へさせられて御手自クランゼヨリに造り玉ひて編笠の紐と成し孫作へ御渡しありされば道中の賊難にも拘はらず無事に公の御手元に届きたるなり又御文の大意は此度三成等が企には少しも御顧念なく此際無二に徳川公へ御忠節然るべし爰元御留守の儀は萬一の事あるとも決して御名の汚る様の振舞はいたすまじく必ず御留守を御忘れ成され度云々とぞ君此時御歳四十四にましまして所謂分別盛に渡らせらるるなり

初一豊公遠州掛川御領地を御出發し玉ふて駿州鞠子迄到らせられしに何分大阪御留守御懸念ありて市川山城といふ老臣を御使として差立ら

る山城は君命を帯び直に引返し行く處早西軍一味の者共通し合ひ容易に通行なしがたく是に於て山城一計を案じ付き身をやつして熱田の禰宜に化け江州水口へさしかかりしに關所の固めきびしく忽見咎められ拘留の身となりて段々取調を受たり抑こくは西軍長東大藏大輔の領分にて折しも番手の中に兼て山城を見知のものありて其星を指さる山城是には吃驚せしがこくぞと態と落着切りて申す様是は迷惑千萬の事かな某は熱田の禰宜に毛頭相違なしと陳ずれど中々承知せず處へ他の一人云やう若狹の市川なれば(山城若狹産なればかく云)何某こそ能存知ならんそれを呼びただし玉へごありて即其人を呼び出したるに山城と目と目を見合せ謂やう扱も世の中には似たる人のあるものかな若狹の市川なれば向疵あるはず念の爲め改め見るべしとありて人々打寄改むるこいへごも素なし然は人違ひならん禰宜とあればいざ祝詞の一ツ所望してためせと申付る山城は更に當惑ながらふと常に銘劍の經文如何成ものや余いまだ心得ず姑らく御舊記にあるまゝを出すを暗誦してあれ

ばそれを一誦して紛らしたるに戦國文字を習はざる悲しさには誰一人
偽とは思はず眞の禰宜と信じて放たるかの辨慶が安宅の關の頓智と同
一なりと謂ふべし(一)豊公後に山城の禰宜に化け讀經せしを聞召し御感
賞の餘武夫は神道をも心得居るが爲になるぞと左右へ御示ありし云々
亦御舊記中に見ゆ併し山城眞に神道者たらんには何ぞ左程に當惑して
銘劍經なるものを以紛らさすとも本ものを誦みてこそよからんされば
公の御意は神道をも心得ずして山城の如く時に取り當惑すべしとの御
戒めのところに仰せられたるならん山城の如くせよとにはあらざる
べし)山城が取調を受けし時最後に出てたる何某といふは其舊知人と知
らる所謂窮鳥懐に入るも捕へる忍びざる情を以かく見のがしたるなら
ん武夫は只殺伐を専らにするのみならず亦所謂武士のなきけと云事知
らざるべからず彼の如きは能此意を解する者と謂て可なり眞に奥ゆか
しくぞある但其姓氏明らかには傳はらざるこそ惜むべし(土佐國崎人傳續
編には大庭土佐守とあり参考とすべし)

山城はかく危険の場合をもよく免かれ是より急ぎて大阪表へ着投す爰
に奇と申すべきは君より御差立の飛脚孫作も道中に於て衣服大小迄剝
ぎ取られ又山城亦かくの如し御夫婦東西の御使者南北の兩道中におる
て非常の難儀にも拘はらず虎口を遁れて使事を全ふす其兩士の忠節固
り著しといへども抑亦御家運の開け行くべきと申すべき君には早速山
城を御邀へありて大に御力を得さ玉ひしが最早形勢切迫して城中へは
人質を取り籠んご上を下へと引繰返す大混雜たり君には御油斷なく御
覺悟成され御守刀を扣へ玉ふ若し亂暴狼藉の事あらば速に御生害成さ
るゝの御心底に渡せらる山城はそれと御察し申上るより先々御心靜に
思召さるべし敵もし來らば山城が日ごろ嗜みの弓勢を以て矢種のあら
ん限り防ぎ參らせん其後御生害遊ばし晩かるまじと言上に及ぶ然るに
己に細川の内室には敵の辱を受んことを恐れ其屋形へ火を放ち失せら
れし由聞へければ君にも晩れを取りて笑をのこさんやと御自から御用
意のククリ袴を召されていざ山城よ介錯を頼むと御決心に在せらるれ



ク、リ袴を召されて御生害の御決心の處
市川山城矢文を射て形勢を探り困て留ま
らせ玉ふ

ば山城しばらく強て御諫め申し尙一應形勢を探偵の上よき御時合知
らせ上んごあれば然らば耻をかゝぬ様に取計へごありてじつご扣へさ
せらる山城は矢文を以て(此時通路己に塞がり矢文の外往復の道なかり
し)御近方諸侯へ尋ね合せしに城中の評議振一變し夫人方の人質は止
りたる由同じく矢文の答あり是に於て一先稍御安心に向へる處へ公の
御許より更に大塚藤右衛門麻田忠左衛門等屈強の武士を差立られ追々
に到着す(此藤右衛門は聞ゆる水練の達者なり此道中川留に出遭ひしも
難なく泳ぎ渡りて馳せ参れり)兼ての御付の人々は服部喜右衛門岡
文左衛門後藤助九郎等に過ぎず

大阪城中の評議は前に申す如く東征諸將の妻子を人質に收め而て各内
顧の心を抱かしむるの術策に出たるものなり然るに細川忠興の内室の
元へは(内室は明智光秀の息女なり後秀林院と號す)己に奉行より其沙汰
ありし内室敢て屈せず兩人の兒達を刺殺したる上いさぎよく生害す是
は七月十七日のことなり(此)此時其臣小笠原伊賀稻富圖書の兩人在り

しが伊賀は内室の介錯を成し火を放ち殉死す圖書は不忠不義の者にて
此場より逐電せり(いふ)然るに前議俄に變じたるは右の細川内室自殺
の事ありしによるものと當時専ら風聞あり(ご)更に親戚の中より人質
を納るべき様沙汰ある處君には御出しに成さるべき相當の方なく依て
御計ひを以奥小性を勤め在る坪内二王と申者を御猶子の體に成され間
に合せ玉ふ(ご)云(二王なるものは圖書の二男にて此時十一歳の少年なり
此時分には幼年の男兒にて奥勤命せらるご見ゆれご後には聞かず)二王
へは岡文左衛門後藤助九郎の兩名を附添へ差出され夫より毛利右馬頭
輝元の方へ預けられ遂に藝州へ送られて關ヶ原落着の上無事差返にな
る由それ當時形勢かくの如し甚迫れり(ご)謂ふべし其他諸侯の留守方殊
に婦女子の狼狽想ひやらる中に於て生て貞婦の鑑となり死して烈女の
譽を留め共に千秋芳名を傳へ玉ふは唯見性秀林の二夫人あるのみ實に
絶代の女丈夫に渡らせらるかの觀望を懷ける七尺の男兒をして愧死せ
しむるに足るべし

因に申す余は百一餘談中に於て御當家廿四萬石の御拜領の事に關し己にくわしく辨じ置きしが世間の誹謗のうち甚しきは奥様の(見性院君)お庇にて其大封を得さらる杯に申す由に付猶又一言すべし抑愚人の説は拘はるに足らず併し愚婦を持ち動もすれば一生涯を厄介のみにて終る天下の不仕合者より見れば或は左もあらんか夫大阪の事を起すに際し東西御隔離の事情最困難なるにも拘はらず先天下の大勢を御洞察在せられ即其策を献ぜらるれば恰も御夫婦間御心志相投合する結果(一豊公の策を徳川公に献ぜられしは既に十數日の前に當る)眞に御夫婦一體と稱すべし頼山陽が詠史七言の詩に「隔離兒女生死關際會風雲向宵間一條笠繫八行字傳得海南千里山」云あり初傳得の傳は博にてありしが後に傳に改められし猶幾分誹りを含める如し矢張世間のそれみ説に基きたる誤りご知らる併し妬心より出たることは取るに足らず却て一方高き眼より見れば其傷のふに足らざるのみならず適以て價直を増すべくと思ふなり爰に思ひ出したる話あり序に

補ふべし舊幕府時代には諸大名方より江戸詰の重役を置くことなり是役人を留守居と稱し重に公邊將軍家に係る用務を勤め又大名同列の交際にも任ず隨て其同役間の集會亦盛なり此會を御留守會と謂て凡三百諸侯の中何の間(將軍殿中の席次即大廣間柳の間杯云如し)又何萬石以上ご大抵其己が戴くべき主君の格録高の下に應じて組合を分立する法なり此集會にはいかなる談話をなすかと尋ぬるに常に己が主家の筋目及其功名の事共並べ立て互に憚からず誇り説く例にて取も直さず先祖家柄自慢なりケ様の談は實は阿房の札付のすべきに限ることなれご其時分は並の事にて人々恠まざりしご見ゆる倍此席上にて動もすれば當家へ風あたる時の御留守居いつも迷惑して自然引込み勝の由の處いつの御代か一人傑出の御留守居出て或日初ての集會に列せり果して例の噂初まり一人ありいふ様山内家は元何の御武功を以御大藩に成らせ玉ふにやご當御留守居は何も武功ごて承り及ばずご答ふればそこが彼等の注文の處にして直ちに付入り御

武功もなきに何故に廿四萬石の大々名に昇らせ玉ふや合點參らず杯
ご頻に詰め掛くことらから従前太刀双を失ふ所なるに當御留守居は
態ござつと答へてそれは吳た者が馬鹿であらうと只此一言云捨てさ
らん體なれば例の一座の面々は迄は是迄は大當違ひに出て終にあちこち
に閉口するに至り此後はさつぱりかゝる事は根を絶ちしごぞ嗚呼此
一言千斤の重さあり傳へずんばあるべからずご或先輩は語れり(全體
は此談等は百一餘談中一豊公のとき付すはずの處かの譯の分らざ
る者共奥様云々ご評判する由に付此處へ持越したる次第なり)
君には素より女紅の事は御得意に在らせらる中にも御針仕事に於る最
御上手ご傳ふ或時色々の切れを集められつぎの小袖を御仕立上げ
の處公の御入魂の御客來あり一覽を所望せられて殊の外感賞の餘殿下
(太閤の事)へ御内覽に入れ然るべしごあり然に一豊公には箇様の事はふ
だん御嫌の御性質にもあり一應御辭退の御心にあれご達ての勤めに依
り遂に御任せになり聽て聚樂へ御覽に入れしに太閤大に賞せられ出仕

の面々へも御吹聴後太閤より禁中へ御内覽に奉るに至しごぞ又君の御
遺墨の一通神庫に御保存あるご承る(公へ御呈しの御文書の由其御筆力
の如何は拜見の上にあらざれば評し奉りがたきも御人物に似て定圓熟
中に勁健を帶るならんか己に才智あるもの學藝に通ぜざるものなしご
いふ信なるべし

余は曩に百一餘談中公の御召の紙子は御手作云々演へしか御手作ご
は無論君の御作に係るものならん前段のつぎの小袖の御手際を
以て推せば紙子御製し位はなんでもなかるべし己に舊時士分の者の
内にて自製せしは多き例なり實はそれが御趣意に叶ふことならんご
れも御手仕事のちなみに申添ゆ

慶長十年の春御夫婦及若君(忠義公此時分は御實父の御讓を以一時康豊
ご御稱しの由)御同道にて伏見へ御上り同四月若君御婚禮整はせられて
六月若君御夫婦若御室は家康公御養女實は松平隱岐守の女たり此時若
君御年十四御室御年十一後若君御十八御室御十五の時に第三世土佐守

或時御客來
あり其所望
に依りツキ
の小袖
を見せ玉ふ



忠豊公御誕生ありしは誠に珍らしき早き御事なりと傳ふ御同船御歸國成らせらる(是歳九月廿一日豊公御遠行)

元和三年十二月四日京都へ御上りに成る(御屋敷所在は桑原町の由後正保三年頃園池中納言方へ御讓渡に相成ごぞ)

君御齡六十一歳を以御逝去遊ばされ見性院殿瀧宗紹劉大師と號し奉り御火葬を以京都妙心寺中大通院内へ收め御廟建つ

御事跡の終に臨で念の爲め一言辨すべし或書には初一豊公牧村牛之助方に御寄寓中御普請役御勤め中或日同役の方々御客來あり此時味噌汁の御馳走を公より仰せ出されしごき君御ぐしを切り其代に抵て玉ふごご載す由然に是は明智の内室にも同談ありご云ひ又外にも似寄のはなしなきにもあらず何分信を措きがたし依て取捨す但し絶代の賢婦人に渡らせ玉ふ御事なれば定て尙御美談もあるべきご信ずれごも右以上一々傳はらざるは遺憾千萬なり

君天賦御聰明に渡らせ且堪忍不拔の御氣性に富ませらる(御容姿の如何

は傳はらずご雖この頃其御肖像の寫を拜するに頭巾袈裟半身の御像にて即御法體ならん一拜御才智の御相は御眉宇の間に溢る如し賛は元和四稔戊午孟秋辰前正法單傳拙叟書焉ご有り(賛詞之を略す)其畫者は何人なるや分らず抑君御當家へ御嫁ぎの時分非常の御貧困にて在しますごごは已述べたる如し然るに君の御里方即御生家の事詳らかならずごいへ共御用意金(御馬代)の高に由て察するも決して貧家に御生にはあらざるべしご信ず果して然らば御衣食初御不自由は御感じなき筈なるにも拘はらず況や其御妙齡を以てかゝる大御不如意間に投ぜさせられ更に御屈しなく愈御婦徳を修め玉ひ戰國以來凡三十六七年間及ぶ終始一の如し遂に大諸侯の貴婦人に至らせられ御晩年は樂々ご御隱居を以て天壽を終へ玉ふ誠に古今たぐい稀なる御方なり其舊土佐一藩は申すに及ばず天下後世永く閨門龜鑑ご仰き奉る

かが美草終

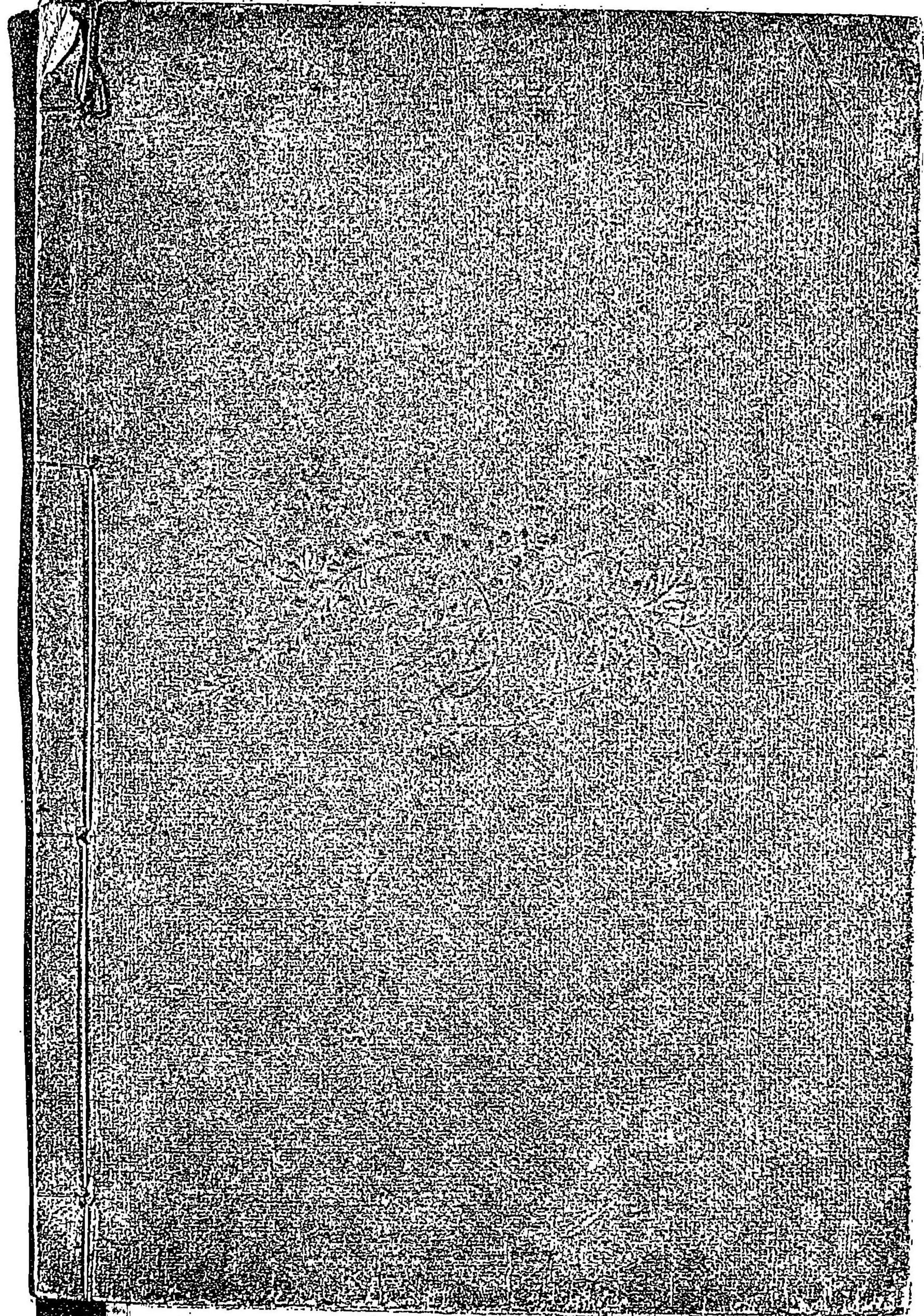
税亦
あり

子種

有任稼

之

若
税可力日面
種多持し
余子至百尔
来極
代一永く
光榮以
記
重名



正
か
が
み
草

特71
481

300893-000-4

特71-481

かがみ草 訂正

長屋重名

M43

AAB-0002

